

「鬼心非鬼心」論

——「兇殺」を中心に——

李 滄 煥

一、「鬼心非鬼心」

「鬼心非鬼心」は明治二十五年十一月五日、「白表・女学雑誌」に發表された北村透谷の作である。文中に「聞きたるは、この夏の事」とあり、透谷が東禪寺境内に住んでいた時の見聞に基づくことがわかる。執筆時期は「今日土曜日の夜、秋雨紅葉を染むるの時なり」とあり、この年十月二十九日とみてよい。一人子英子の生まれてからほぼ五か月振りのものである。

夫は真面目で正直な人であり、妻は慎み深い性格の持ち主である。二人の間に十五歳の娘と六歳の少児があり、四人家族である。八百屋の担ぎ売りをして生活は貧しいながら、その日その日を辛うじて生きていく。折には小金を貸し出す勢いさえもある。しかし、妻はいつの頃からか、何となく気鬱の様子が見え始める。が、夫はもろんのこと近所の人々もそれに気付かない。ただ十五歳の娘のみはさすが妻の気鬱症を面白くないと思う。しかも、ここ三四年の金融の逼迫のために世の有様は様々の転変を見たが、その日稼ぎの商人に軽からぬ不幸をもたらした。正直をもって商売するものに不正の損失を蒙らせることも多い。この夫婦はまださほどの困難には陥ら

ない。が、妻は気鬱のようすをそれとなく見せ始める。時として夫婦は苦情を訴えて互いに顔を赤めることもある。生活の状態は以前として「其日に得たる錢をもて明日の米を買ふ事なれば、米一粒の尊さは余人の能く知るところにあらず」とある。しかし、「或日の事」、妻は娘を家に残し、少児を携えて出かける。一家の生活に苦しむ彼女は米を買う錢を算えつつ、ふと次の言葉を漏らす。「もしこの小児なかりせば、日々に二錢を省くことを得べきに」と。ついに彼女は東禪寺のうらで小児を殺してしまふ。娘は日が暮れても帰らぬ母と弟を案じわびて待つ。ついに「あれは殺して来たよ」という母の話聞かせてもらってははじめは「戯れ」と思う。現場に行ってみると、弟は石に打ちつけられて墓のそばの石桶の中にさかさまに沈められている。そして、母は「狂女」になり、あっちこちを徘徊する。深く罪を感じ、「そこにて児を殺したる事あれば、こよひは我も共に死なむと思ひてなり」と叫ぶ。運よく通りかかった巡査により、精神病院に送られる。その後、彼女はもとの家に戻るが、そこには住まないで、どこかに移っていつてしまふ。

以上が粗筋である。「兇殺」に至るまでの経緯とその後の「狂女」

の心境が見事に描かれている。語り手の「われ」はこの話を按摩男に聞かせてもらった。しかも「われ」は必ずしも透谷であることは言い切れないが、彼がこの事件をどう観ているかが問題になる。即ち、何が実の母を「児殺」までに追い詰めて行つたのかということである。文脈から考へるに、世の有様がいくら金融の逼迫という惨めな立場に取り囲まれていても、四人家族は貧しいながらも財政的にそれほど窮迫していない。それが「或日の事」、妻は一日二銭の米代の儉約のためとふと口の洩れた言葉を娘に聞かせてやつて「児殺」を実行に移す。この予期せぬ「或日の事」には妻の気鬱症が何らかの形で働きかけたわけである。正常人であるならば、あえて「児殺」をするほどの状況ではない。そこに気鬱症の妻を登場させている透谷の狙いがあると思われる。それで、家庭の貧困と妻の気鬱症というこれらの二つの要因が「児殺」を触発させたとみるべきである。しかし、透谷は「児殺」の原因を妻の気鬱症という個人の問題よりもむしろ「社会の罪」に求めようとする。いわば、実の母を「偶然の狂乱」を誘発させて「児殺」にまで追い詰めたのは「社会の罪」であり、なおその裏には「まがつびの魔力」が潜んでいると透谷は語る。

つまり、透谷は人間の罪、個人の罪を書いていない。人間を取り巻く運命、社会等が人間に与える影響、なお、そこに見られる「親の情」に重点を置いている。実の子供を殺した母親。彼女は気が「狂」って自分も死ぬと言う。それならば、初めから殺さなければよかつたはずである。殺してしまつた母親の心は「鬼心」である。一方、一夜明けると罪を感じ、「共に死なむ」という「狂女」の心が

「非鬼心」である。母親の心には「鬼心」と「非鬼心」という二つの矛盾した心が潜んでいる。これは一体どういふわけであろうか。何が母親の心を「鬼心」から「非鬼心」に立ち返らせたのであるうか。言い換えれば、母親が正氣に戻つて苦しんだのは、そこに「親の情」があつたからこそである。「あわれや子を思ふ親の情」、可愛そうな子供への側隠の情が母親を「狂」させた。「狂」にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり」と。母親の心境が弁証法をもつて解釈される。「鬼心」が「狂」であるか、それとも「非鬼心」が「狂ならず」か。それが別ち難き母親の心、それこそ「猶ほ狂」であり、「狂乱」でもある。そこに「親の情」が隠在する。

以上にみてわかるように、透谷における「児殺」は社会と個人の問題に深く関わり合つている。「社会の罪」に象徴されるべき「まがつびの魔力」、そして貧困と「狂」がそれである。しかも「児殺」とは「親の情」なしには全く成り立たないものである。そこで、論者は「児殺」を支える二つの条件の中で「狂」の問題はさておいて、まず貧困の問題、いわば「餓」と「親の情」に焦点を合わせる。それに間引思想をはじめとする日本の子殺し伝承という観点から照り合わせて「児殺」の世界に近付いて行きたいと思う。その裏付けとしては日本の子殺し伝承には「児殺」を支える「餓」と「親の情」が内在されているからである。この作に関する先行研究としては平岡敏夫氏と鈴木明美氏等のものがある。平岡氏はこの作の小説性とそこに流れている民衆思想、いわば「弱者」像に焦点を置いている。そして、鈴木氏は透谷の自由民権運動体験とキリスト教という観点からこの作に照明をあてている。以上の先行研究はいずれにせよ「児

殺」を取り巻く社会の状況に関わろうとするが、日本の子殺し伝承からの影響関係については触れられていない。本稿の展開は「兇殺」と関係がありそうな評文「餓」、書評「罪と罰」の殺人罪」、日本の子殺し伝承、詩「みどりこ」、「鬼心」等の順に従って進んでいきたいと思う。

二、評文「餓」

透谷には「餓」という四百字詰の原稿紙四枚ぐらいの分量の短文がある。これは明治二十五年十一月二十六日、「平和」第八号に発表された。「鬼心非鬼心」より丁度三週間後のものである。そこに「餓」は美に大敵なり、「彼は常に吾人の周圍に毒箭を注射す」、「滔々たる天下、「餓」の奴隸たらざるもの幾個かある」とある。いわば、「餓」えることが人間の性情をどう変えるかが語られている。要するに、この文は母親をして「兇殺」へと誘ったその主因が「餓」であることを示唆する。しかもその母親の行為は意図的なものではなく、「偶然的狂乱」に因るものである。だから、これは大逆不道という悲劇でありながらも母親の罪ではない。むしろその原因を与えたることになった「社会の罪」である。透谷は母親を罪人としてみない、むしろ「人間の運命のはかなさ」を思つて同情する。いわば、この母親をそこまで追いつめたのは生活の貧窮であり、それは「社会の罪」である。人間を「餓」地獄に落とす「社会の罪」、その凄惨極まる「実世界」の渦巻きの中において「親の情」というものが浮き彫りにされている。

透谷における「餓」の問題を示唆するもう一つの文がある。これ

は「三日幻境」（明治二十五年八月）である。そこには透谷が自由民権運動に身を投じていた少年期の消息を知るのに非常に重要な記述を含んでいる。自由民権運動時代、透谷は革命の夢を抱いて多摩地方を放浪する。八王子の川口村、「幻境」に身を隠すのは警察の眼を逃れるためであろう。宮崎湖処子の回想では、透谷は東京専門学校在籍中、勉強する反面、トラヴェラー（旅行者）とあだ名されるほど、「一旦飄然として出れば、五六十日は帰り来らず、蓋し一奇人なり」と評される放浪をしている。「土岐運来」と染めた印半纏を着て、東海道筋で小間物の行商もした。川口村での「牢獄」生活を回想する一文に「餓鬼道」が出てくる。「浮世の迷巷」に踏み迷い、「産破れ、家廢れて、我が瘦腕をもて活計の道に奔走するの止むを得ざるに至りし事もあり」、「あはや餓鬼道に迷ひ入らんとせし事もあり」、「天地の間に生れたるこの身を訝かりて、自殺を企てし事も幾回なりしか」とある。明治十七年、自由民権運動の折、透谷は「餓鬼道」に迷う人民と志士らの姿を見て、惻隱の情を感じさせられた。その当時の状況を知らせる「富士山遊びの記憶」という透谷の手記がある。そこにも「餓鬼道」が語られている。「志士どもが杖にすがりて進み行く、飢餓に其身も瘦せ果て、」とあり、人民、志士の辛苦だけでなく、三多摩地方の自由民権運動の時期、透谷自身も「餓鬼道」を直接に体験したはずである。そこで透谷は政治家になって「萬民の為に大に計る」（石坂ミナ宛書簡明治二十年八月十八日）ことを覚悟する。

透谷は明治二十三年九月二十四日の日記にさりげなく「米九升七合なり」と記する。一円につき九升七合の米が買えるという意であ

る。明治二十二年下半期から米価の暴騰、金融の逼迫がはじまり、日本最初の経済恐慌が生じた。庶民には米が高くなってもせめて一円一斗あつてほしいのである。米の値段があがつて困っているの一句である。「もしこの小兒なかりせば、日々に二錢を省くことを得」る。二錢とは六歳の子供の一日の米代である。「其日に得たる錢をもて明日の米を買ふ事なれば、米一粒の尊さ余人の能く知るところではない。我が子を殺す母の溜め息が聞こえてくる。透谷はこの悲しげな母の様子に自由民権運動時代の自分の凄惨な様子を重ね合わせるたのであろう

三、書評「罪と罰」の殺人罪

『罪と罰』はドストエフスキーの小説である。これは内田魯庵の翻訳で第一巻が明治二十五年十一月十日に、第二巻が明治二十六年二月二十五日に刊行された。しかし、この翻訳物は全体の半分ぐらゐに過ぎない。透谷は「罪と罰」と「罪と罰」の殺人罪」という二つの書評をそれぞれ明治二十五年十二月十七日、その翌年一月十四日に発表する。だから書評の時点で透谷の読んだ『罪と罰』はその第一巻であり、全体の四分の一に過ぎない。「鬼心非鬼心」との関係で見ると、最初の書評「罪と罰」はこれよりも一か月半足らず後の時期のものであるということがわかる。そして両者共に殺人を主題にしている点に共通性がある。

透谷の両作の執筆意図は何であろうか。「心池蓮」（明治二十六年三月）によると、批評とは「人間進歩」に不可欠の一要素である。その目的は「人間を繞れる境遇と人間を抱ける運命を洞究」すると

ころにある。例えば、「善」「悪」もはじめからの出来物ではない。そこには必ずそうならざるを得ない「根」がある。それ故水面に浮かぶ「罪の葉」を見るものではなく「罪の根」を透視すべきである。要するに、一旦二錢の儉約のために我が子を殺す母、そして何の仇もなき高利貸を虐殺する大学生ラスコーリニコフにその罪を問うものではない。それを取り巻く「罪の根」はただならぬ「社会の罪」であり、それを透谷は深く刻もうとする。

二錢は米一合九勺の値段である。六歳の子供の一日分である。この二錢のために我が子を殺すというあまりにも異常過ぎる事件。これが何故「社会の罪」であるか。「世のありさま」と言えば、最近三四年の金融の逼迫のために様々な変転を見せる。即ち、真面目に働いても錢を稼ぐところか「不正の損失を蒙る」という「世のありさま」である。いわば、たかが二錢の金にさえ拘る社会状況である。

一方、ラスコーリニコフを取り巻く社会の状況はどうなるか。酒場での退職官吏マルメラードフの話が興味深い。彼の娘ソーニヤが娼婦にならざるを得なかつたその背景が語られている。「蚊細い女の瘦腕で今日何うして生計が立ちます。何か特別な藝でもあるなら兎にかく」(p.29)と云々。貧乏な純潔な少女が純潔な仕事をして、どれだけの稼ぎが出来るか。特別な芸もない者が休まず働きに働いたとしても、縫賃として一日に十五カペイカもおぼつかないくらいである。ソーニヤの弟たちはひもじががつて泣くばかりである。両作は一旦二錢の金、そして十五カペイカにさえ困るような「世のありさま」を設定して、そこに生きていく人間の性情を問うものである。だから、両作の「狂女」と大学生ラスコーリニコフ、それぞれの殺

人は個人の罪でなく、「社会の罪」に帰結する。

透谷は書評「罪と罰」の中に「第八回以後はその罪によりていかなる『罰』、精神的の罰、心中の鬼を穿ち出で、益精に、益妙なり」と評する。透谷は小説「罪と罰」を「心中の鬼を穿ち出」た「心理的小説」とみている。この「心中の鬼」とは他ならぬ「鬼心」を言う。だから、書評「罪と罰」は前作「鬼心非鬼心」に続くもう一つの「心理的小説」である。ここに両作の繋りがある。透谷が小説「罪と罰」にあれば心酔したのはそこで自分が求めようとする当のものを見付けだしたからこそである。両作は共に殺人を素材にしてその原因を餓えに求めている。我が子を殺す母がそれであり、ラスコーリニコフが高利貸老婆を虐殺するに至るまでの道程がそれである。その実行する前とその後の主人公達のそれぞれの内面世界が見事に描かれている。

ラスコーリニコフには学資の出場所がないばかりに、もう何か月前に大学をやめ、家庭教師の仕事もすっかりなくなつた。下宿の主婦が食事をよこさなくなつてからもう二週間に成るのに、彼は食うものもなしで坐っている。今日までまだ一度も、かけあいに行こうとすら考えない。女中に聞かれても「考へる事」(P45)と答えるだけである。その瞬間彼はわれながら、自分の考えがときどき混乱することや、自分の心身がひどく弱つていことに気付く。実際彼は、もう二日間、ほとんど何も食っていない。もつともこういうことは、あまりものに凝りすぎた「ある種の偏執狂」によくある。もう「真実に頼る處がな」(P28)い、というこの一句が窮迫がどんなにひどいものであるかを訴えている。質屋から帰り道に飲み屋

に寄る。自分がこう急に弱つてしまったのも、一つは空腹のせいであると思つたので、なおのこと冷たいビールと乾パンひときれでもたべようかと思う。食るように最初の一杯を飲み干すと、たちまち気分がすつと軽くなつて、思考力がはつきりする。

退職官吏マルメラードフは赤貧に処した人間の境遇を語る。「貧は不道徳にあらず」(P22)これは真実であるが、「乞食」(P22)となると悪徳である。まだ貧乏のうちには人間は、持つて生れた感情の品位を保つてもいられるが、素寒貧となると、第一自分が自分を侮辱する心構えも生じる。すべて未知の人に対しておほえる「忌まはしき奇怪の官能」(P18)が生じるのみである。なにしろ人間とはせめてどんなところにして、どこか一か所ぐらいは行くところがあるはずである。が、もうどこへも行く先がなくなると困り切る、と。非職官吏の飲酒放蕩懶惰は彼自身はもろろんのこと、愛らしき妻と無邪気の娘さえも精神的に殺す。娘ソーニヤが娼婦になつたのは父の飲酒のためである。周りの人々への嫌悪の情はついに自分に跳ね返る。「ある種の偏執狂」、ヒポコンテリア(氣鬱病)は、透谷に言わせると、「無知之を病まず、知識あるもの之を病む事多」い。この病氣は「既に激昂してある少年の神経」(P11)を、ますます不愉快に刺激する。ついに、ラスコーリニコフは次のような自己矛盾の論理に取りつかれて一見なんの価値もないかと思われる一金貸老婆を殺す。「若し千の善根を施くに足れば一の小悪は消滅しちまう筈だ。無用なる一人の命を取て衰亡の淵に臨る千人の命を救ふに何の差向があらう」(P87)と。しかし、斧の一撃に老婆を倒した足許から、たちまち理論は崩れはじめて、冷厳な現実が容赦なくひ

しひしと彼の一身におそいかかる。

小説『罪と罰』は「彼の奇怪なる一大巨人（露西亞）の暗黒なる社界の側面を暴露して余すところなし」と透谷は評する。「鬼心非鬼心」の作品の規模は八咫聞としての小品に過ぎない。が、「露西亞）の暗黒なる社界」の舞台を日本に移し変えたのが「鬼心非鬼心」である。餓えに餓えた人間にはもうどこへも行くと先がない。もう「真実に頼る處がな」（p28）い。何の罪もなき我が子を殺す母、何の仇もなき老婆を殺す大学生。この二つの殺人は「大逆不道此の上もあらぬ行為である。なお、それぞれは禽獣でさえ、そして「学問なく分別なきものすら」考えられぬ行為である。評文「餓」に言わせると、「餓」は実に大敵なり。別して精神的人物の大敵なり。多数の人、『餓』の為に其氣節を枉ぐ。彼は常に吾人の周圍に毒箭を注射す」とある。透谷はこの二つの殺人の原因を「社会の罪」という同じ認識をもって解釈する。即ち、両作は「罪の業」よりもむしろ「罪の根」を刻もうとすることによって「人の性情」を問うものである。これが透谷をして小説『罪と罰』を理解しやすくしたはずである。

四、日本の子殺し伝承

子殺しは生活の窮迫のためである。それはおおよそ幼児殺しと嬰児殺しという二つの類型に分けられる。特に、生れたばかりの赤子、嬰児を殺すのを問引という。問引は昔から伝承されているが、江戸後期の凶作、餓饉を契機に一挙に広がり、武家といわず、町人といわず、これを用いるものが多かった。問引は江戸時代後期における

人口の増加が少なかった理由の一つとしてあげられている。ほとんど全国的に行なわれていた。明治以後においてもこの風習は容易に根絶されなかつた。一方、七歳以下の嬰児と幼児が我が親に殺される場合が多い。これも問引と同じく昔から伝承されていたが、明治以後に至つて、親子心中の形で行なわれ始めた。柳田国男氏に言わせると、生活の苦闘に堪えかねた世の若い母親たちが、まだ東西も知らぬ幼児を道連れにするのでなければ死なぬというのは、明治以後の一つの流行であつた。その背景には子殺しを殺人と意識し難いという日本文化の独自性がある。「七歳までは神の子」と言い、生れたばかりの赤子はもちろんのこと、一般に六歳くらいから下の子供はほとんど人間としての待遇を与えられていなかった。それ故に、問引であれ、道連れのための子殺しであれ、いずれにせよ殺人として意識されていない。それが社会通念として通用していたらしい。七歳以上の子供も子殺しの対象になるが、十五歳になれば、名実ともに一人前と認められてその危険から免れるようになった。六歳と十五歳の二人子の中で、六歳の方を殺して、自分もすぐ一緒に死のうとする「狂女」。この「鬼心非鬼心」の筋は以上のような子殺し伝承に相応しい。

深沢七郎の著作『榎山節考』は民間伝承の棄老伝説をテーマとした小説である。そこに問引の話が出る。家や村に食糧が乏しいので、村中の人々は極貧に喘ぎながら暮す。働く能力を失つた老婆は七十歳になれば、自分の息子の背板に負われて、榎山に捨てられる。これが村の掟である。ついにおりん自ら榎山に行く決心を息子夫婦に打ち明ける。その折、おりんの榎山参りを止めさせようと家族みん

なが身ごもつた孫夫婦の赤子を「捨ちやる」相談を平気でする。食糧事情の窮迫のために赤子「捨ちやる」が平気で大人の口にはせられる。いつの時代、どの世界においても、子供はその生存権を親によつて支配されてきた。貧しさの中で殺され、餓死させられ、遺棄された多くの子供達。子供の運命とはそんなに悲しきものであろうか。

『今昔物語』巻第九、震旦郭巨の話に子殺しの場面が出る。郭巨の夫婦は懇ろに母を養う。しかし、貧困で常に餓えに苦しむ。郭巨は嘆き悲しんで妻と鬩る。老母を養うために六歳の子を穴に埋めようとする。二人は涙を呑みながら山に行く。三尺ばかりの土を掘ると、底に鋤の先に固く当たるものがある。石かと思つて掘っていくと、黄金の釜である。これは我が孝養心の深さのために天から賜つたものであると郭巨は喜ぶ。彼は富貴を得、ついに国王に重用される。この郭巨の話は子殺し伝承の一つの原型になる。民俗学者柳田国男氏の「山の人生」に子殺しの話が「私」の「三十年あまり前」の記憶の形で紹介されている。世間のひどく不景気の年に、西美濃の山の中で炭を焼く五十ばかりの男が、十二歳の子供を二人まで、鉞で斫り殺したことがある。なんとしても炭は売れず、何度里へ降りても、いつも一合の米も手に入らない。最後の日にも空手で戻つてきて、餓え切つている小さい者の顔を見るのがつらさに、すつと小屋の奥へ入つて昼寝をする。目が覚めてみると、小屋の口一杯に夕日がさしている。秋の末のことである。二人の子供が日当りのところにしゃがんで、頻に何かをしている。傍に行つてみると、一生懸命に仕事に使う大きな斧を磨いている。お父さん、これで私たち

を殺してくれと言つたそうである。そうして二人の子供は入口の材木を枕にして仰向けに寝る。それを見るときくらくとして、前後の考えもなく二人の首を打ち落してしまふ。それでも自分は死ぬことが出来ず、やがて捕らえられて牢に入れられた、とある。この「山の人生」の話はあまりにも叙情的であり、読者に涙を汲ませるようである。

間引は昔から伝承されている。特に、江戸後期の凶作、長期間の餓饉を契機に一挙に広がる。このような習俗の蔓延に領主は赤子間引の根絶を期する。しかし、官庁の厳しい取り締まりにもかかわらず、間引はなかなか断絶されない。裕福な家庭においても第四子以下は間引の対象になる。当時は、たとえ嬰兒殺しをしてもそれは刑法の対象になるより、もっぱら教化の対象になる。社会全体が殺人と意識しない。近世農民において、間引は一人前の人間を殺すのは異なつた感情のもとに行なわれた。間引を社会的にも許容する文化的背景は如何なるものであろうか。そこには日本伝統の死生観が潜んでいる。

日本伝統の死生観は「徒然草」百五十五段によくあらわれている。春が暮れて後夏になり、夏が終つて秋が来るというものではない。春はそのまま夏の気配をほらみ、夏のうちから既に秋の趣は流通し、秋はそのままでもう寒くなる。そして、木の葉が落ちるのも先に落ちてから芽ぐむというものではない。下より芽ぐみさす生命の力に堪え切れないで、古い葉が落ちるのである。このような生命の連続的把握は、生命の誕生と死の問題をとらえるにあつても四季のめぐりと譲り葉のように転生の連続、生と死が互いに補充し合うも

のであると考えられるべきである。「我牢獄」(明治二十五年六月)

には透谷の「牢獄」意識が語られている。全体に牢獄に閉じ込められた「我」の切迫した心境に溢れている。「死の刺は我が後に來たりて機を覗へり」とその「我」に「死」が近付く。これは「徒然草」の「死期はついでを待たず。死は前よりも來らず、かねて後に迫れり」(百五十五段)というところを典拠にする。透谷が日本の伝統的死生観を受け止めていることがわかる。

つまり、人間の生とは絶対的、一回的なものではなく、あの世(カミの世界)からこの世(ヒトの世界)へ、そしてまたこの世からあの世へと、あたかも四季のめぐりのように輪廻するものである。四季のうつろいに象徴される日本の風土の観照から成立した自然観や大陸から伝來した輪廻、転生の思想の影響をうけている。このような伝統的死生観が子殺し思想の根底に流れ込んでいる。「七歳までは神の子」と言い、神と人間の中間的存在として見なされた。だから、嬰兒はまだこの世の人として迎え入れられたものではなく、何らかの理由でこのままこの世に迎え入れ難ければ、カミの世界へも一度戻すものと考えられた。間引きを多くの地方で「戻す」「帰す」と表現するのはこのような意識の反映とみることができ¹²。しかも間引いた子の死骸を家の床下に埋めるという慣習もある。これは柳田国男氏に言わせれば、「早く再び此世の光に逢はせるやうに、成るべく近い處に休めて置いて、出て來やすいやうにしようといふ趣意が加はつて居た¹³」とある。

五、詩「みどりご」

詩「みどりご」は明治二十五年十一月二十六日、「平和」第八号に発表された。透谷の一女英子はこの年六月一日に生まれた。「鬼心非鬼心」より丁度三週間後、「ツルゲネーフの小品」より丁度一か月前のものである。この時期は当然透谷に「親の情」が満ち溢れている。

ゆたかにねむるみどりごは、／うきよの外の夢を見て、
母のひざをば極楽の、／たまのうてなと思ふらむ。

ひろき世界も世の人の、／心の中とはいとせまし。

ねむれみどりごいつまでも、／刺なくひろきひざの上に。

母親にとつて子供が最も可愛らしい時はいつであろうか。おそらく子供が母親の懷に抱かれてやすやすと眠る時ではなからうか。万葉集の山上憶良の「古日」(六一—90)の歌が思い浮かべられる。夕方になると、さあ寝るよと手に縋りつき、父さんも母さんもそばを離れないで真ん中に寝てねとすがりつく。この一人子幼い古日の歌から英子の可愛らしさが見えてくる。これ以上の親子の幸せが感じられるのであろうか。生まれてからやつと半年目の英子。透谷は貴重な子を得て久しぶりに親になつた誇りに満ち溢れている。

この詩は母と嬰兒二人の關係に焦点を合わせて設定されている。これは「鬼心非鬼心」と同じ構成である。「鬼心非鬼心」が悽慘な「うきよ」を暴露する反面、この詩は「うきよの外」を夢見る嬰兒を歌っている。そこには嬰兒殺しの面影は全く見られない。「母のひざ」で安らかに寝入つた嬰兒は「うきよの外」の夢を見て豊かに眠る。その嬰兒の内面世界が重視されている。大変穏やかな雰囲気を読む

者にもたらしめてくれる。

全体が八行の短詩である。「ゆたかに」は「ねむるみどりご」を修飾する。嬰兒の夢見る世界は「うきよ」ではなく「うきよの外」である。この詩には「母のひざ」が二回繰り返されている。それだけに詩全体には嬰兒への母の切ない気持ちの色濃く流れている。母は「刺」だらけの「うきよ」を嬰兒に見させたくないであろう。それ故に嬰兒を「ねむ」らせて「うきよの外」の「夢」の世界に導く。嬰兒には自分を安らかに眠らせてくれる「母のひざ」が「極楽」であり、「刺なくひろき」世界である。「うきよ」は心の「せま」き人々ばかりの現実世界である。母は嬰兒に「ねむれ」という命令形を使っている。これは、「いつまでも」「うきよ」から嬰兒を見守る「母のひざ」の役割を強調する効果をもたらす。

前作「鬼心非鬼心」においては二銭の米代のために我が子を殺す「親の情」が描かれている。が、この詩にはその「狂女」の様子は全く見られず、ただ嬰兒への優しい「親の情」のみが読み取れる。「鬼心非鬼心」には間引思想をはじめとする日本の子殺し伝承が流れ込んでいる。そこには二つの両極端の様相を見せる。一方は、我が子を殺すこと。他方は、間引された子をあの世に「戻す」ことである。この「戻す」行為は無邪気な嬰兒を「うきよの外」を夢みさせるというこの詩の「母のひざ」に似通っている。いわば「想世界」の持ち主嬰兒が「実世界」との闘いで敗れて立ち籠もる牙城は他ならぬ「母のひざ」である。この詩全体には「眠る」を媒介して母親の嬰兒への願望が一貫している。まさしく透谷も長女英子の誕生をきっかけに「親の情」をしみじみと感じさせられたのであろう。

「鬼心非鬼心」論 —— 「児殺」を中心に ——

透谷には詩「みどりご」のように嬰兒を主題とした「彈琴」と「彈琴と嬰兒」という短詩がある。「彈琴と嬰兒」は「彈琴」を加筆完成したものであり、詩「みどりご」よりほぼ半年後の明治二十六年五月三日に発表された。両者は共に「何を笑むなるみどりご」に始まる。詩「みどりご」の「ゆたかにねむるみどりご」のイメージは見られない。それに「母のひざ」の変わりに「琵琶弾く人」が登場して嬰兒と対応関係をなしている。橋詰静子氏は詩「みどりご」は「彈琴」の草稿であると言う。しかし、「彈琴」は詩「みどりご」に見られる「ねむる」嬰兒、なお親子の関係をもって設定されていない。それ故に、詩「みどりご」は一つの独立した詩編として見るべきであろう。

六、「鬼心」

詩「みどりご」と「鬼心非鬼心」、両者は共に「親の情」を主題にする。しかし、両者は互いに対極の様相を見せている。一方は「児殺」す「鬼心」の「狂女」の凄じい様子が、他方は「うきよ」から嬰兒を見守って「極楽」を夢見させる「母のひざ」がそれぞれ描かれている。このような対極的の「親の情」を設定している透谷の意図は何であろうか。要するに、これは「鬼心」「非鬼心」という「心」の問題に関わる。

透谷は既に「蓬萊曲」（明治二十四年五月）の「蓬萊山頂」において「性」の二元性を語っている。人間の「性」には「神性」と「人性」という二つの「性」がある。両者は小休なく生命の尽きるまで戦い続けて、人間を病ませて疲らせて悩ませる。「心機妙変を論ず」

(明治二十五年九月)には「性」が「心」に置き換えられている。「神の如き性、人の中にあり、人の如き性、人の中にあり、此二者は常久の戦士なり」と。また、「人間の心池」には「善鬼悪鬼美鬼醜鬼」が混交し、乱戦する。これは人間が他の動物と異なるところである。「至善」は「悪」の外被に蔽われている。一方、「至悪」は「善」の皮肉に包まれている。これは「古来哲士の為難しとするところ、凡俗の容易に企つる能ざる難事なり」とある。この「心池」の問題は「心池蓮」(明治二十六年三月)に続く。ここに複雑でとらえ難い「人間の本性」が語られている。「心池」での「争い」とは「善と悪」、「明と暗」、「神」と「悪魔」にのみ限られたものではない。この「紛闘」は到底吾人の自ら測り知ることを得ざるまでの深さに広がれる。しかし、「この『紛闘』は、吾人を提げて天にまで達せしむる外面鬼にして、而して内面神女なるものなり」とある。

この「心池」の問題は「鬼心非鬼心」の主題「鬼心」のことを示唆する。「兇殺」す「親の情」が「鬼心」である。一方、「うきよ」から嬰兒を見守って「極楽」を夢見させる「母のひざ」が「非鬼心」である。しかし、「鬼心」が「至悪」か、それとも「非鬼心」が「至善」か。これはまさしくとらえ難い「人間の本性」である。この二者は「池心」の中で互いに交又しながら相手を包み合う。言い換えれば、「鬼心」は「非鬼心」を、「非鬼心」は「鬼心」を互いに蔽い合う。これは休みなく生命の尽きるまで「紛闘」する。いわば、この二者は「常久の戦士」である。しかも、この「紛闘」は「吾人を提げて天にまで達せしむる外面鬼にして、而して内面神女なるもの」

である。即ち、「紛闘」の外面は「鬼心」であり、その内面は「神女」である。つまり、「親の情」には「鬼心」と「神女」が混交している。「兇殺」す「鬼心」とは「まがつびの魔力」による「偶然的狂乱」の結果である。

この「まがつびの魔力」は「他界に対する観念」の言う「邪悪なる魔力」(サタンニク・パワー)に当たると。「邪悪なる魔力」は「天力」(ヘブンリー・パワー)に対する観念と共に「人間の観念の区域を拡張」する。透谷に言わせると東洋の思想・文学は「他界の観念」に乏しい。禅学と儒学は「他界に対する観念」の大敵である。禅は心を法として想像を閉じる。儒学は実際の思想を尊んで「他界の美醜」を想像しない。一方、「基督の神性」は「東洋の唯心的思想」の達し得ぬところに「観念」を及ぼすと同時に、「サタンの魔性」は「東洋の悪鬼思想」の至らぬところまで「観念」を到達させる。透谷はハムレットの幽霊をその一例として挙げてゐる。しかし、透谷は「まがつびの魔力」による「兇殺」の「鬼心」に「他界に対する観念」を見付けたわけである。言い換えれば、「兇殺」という日本の子殺し伝承の底を流れている「遠大高遠なる鬼神」を詩想中に産み出すことが出来たと見えよう。

続いて、透谷は東西の「死」を見比べる。「死てふ眠の中にいかなる夢をやるらむ。」「死んで仕舞へば真くらやみ。」と。「死は眠は西洋の詩歌であり、「死は終」は東洋のものであり、ここには「他界に対する観念」が乏しい。前者は基督教思想、後者は仏教思想からのものである。詩「みどりご」には「ねむるみどりご」が描かれている。「兇殺」す「親の情」と「母のひざ」にすやすやと「ねむ

